

離島へ薬 ドローン輸送

香大など粟島で実験

オンライン診療と合わせ

離島に住む患者をオンラインなどで遠隔診療し、処方薬などをドローンで運ぶ。そんな構想の実現に向け、香川大などが検討を進めている。7月30日には、三豊市詫間町の須田港と約4キロ離れた粟島に実際にドローンを飛ばす実証実験が行われた。関係者は「安心して島に住み続けることができるような環境の実現に向け、今度も実験を続けたい」と話す。

(新居重人)

実験をしたのは、香川大と、あいおいニッセイ同和損保、ドローン輸送の事業化に取り組んでいる「かもめや」(高松市)。全国の離島では十分な診療を受けられないのに加え、大規模災害時には旅客船の運航が休止となり、島

民の暮らしに不可欠な医療品や食料が届かない可能性もある。そんな課題を克服しようと、香川大瀬戸内圏研究センターの特任教授で、粟島の診療所で医師も務める原量宏さんが5年前から思い描き、今回ようやく実験が実現した。

同島には診療所があるが、常勤の医師はおらず、診療所には週に数回、医師が派遣されている。実験は、島民が胸の痛みを訴えて診療所を訪れたが、検査機器がないため、採血した血液の島からの搬送などをするという想定で行われた。

①粟島に向けて飛ぶドローン ②実験に使われたドローン (いずれも7月30日、三豊市で)

須田港側では関係者約30人、粟島では市立詫間小の5年生75人が、重さ15キロの荷物が運搬できる全長約1メートルのヘリコプター型のドローンを使って往復する様子を見守った。1回目は途中で海に墜落したため、予備機を使って再挑戦。片道3分程度で飛び、往復に成功した。

須田港と粟島を結ぶ海上は、船の往来が少ないなど、飛行実験に適していたことから、選んだという。原特任教授は「離島での診療には、遠隔診療とドローンを組み合わせることが重要。今後は様々なタイプのドローンを試しながら、世界中の離島に住む人たちの有効な医療支援として提案できるよう、ノウハウの構築を目指したい」と話した。

三豊市も今回の実験に理解を示していて、山下昭史

市長は「三豊発の遠隔地の医療対策が世界に広がるかもしれないと思うとワクワクする。実現に向けて支援していきたい」と話していた。

